吉田秀和
音追いびと
◉ 丘山万里子著

音楽批評家である著者は、その批評の原点とする吉田秀和のなかに入り、吉田がどのような姿勢で音楽と向き合うのかということを探った『吉田秀和私論なお語りたき音』を1992年に出版しているが、本書はその増補版で、近年、吉田秀和が力をいれている絵画論について述べたものを新たに加えている。

前半の私論の部分では、吉田が音楽とは何か、と聞かれたときの「初めは母であり、それから父になった。……しかし、このごろはまた母に戻ったようです」という述懐をヒントにしながら、譜例の引用、音の細密なアナリーゼなどから導き出される結論によって、だからこの音楽をこう考えるのだ、とする初期からずっと保持されている吉田のスタイルを、その音楽批評の確実さの証と述べている。そして、後半では吉田のセザンヌ論やマネ論を取り上げ、絵画要素を詳細に分析する姿勢の奥にあるものを考えていく。（B6判・197頁・2000円・アルヒール、すずさわ書店発売）

インナー・チャイルド改訂版
本当のあなたを取り戻す方法
◉ ジョン・ブラッドショー著
新里里春訳

子どもは、親から無条件に愛され、受け入れられることで自分を信じ、他人を信頼することができるようになるのだが、親に無視され、虐待を受けて育った場合は、心の傷を抱え、誰も信頼できないままに大人になる。

本書は、このような子ども時代に傷ついた心を「インナーチャイルド」といい、特に虐待する大人がアルコール依存症であった場合は、その被虐待児を「アダルト・チルドレン」と定義したもので、アメリカでは出版と同時に大反響を呼んだロングセラーでもある。ここでは、交流分析療法の理論を用いてアダルトチルドレンの概念を解説し、その傷ついた心を再生させるための訓練法と自習用エクササイズなどを体系的に紹介している。（B6判・424頁・1600円・日本放送出版協会）

東アジアの日本大衆文化
◉ 石井健一編著

東アジア、特に台湾、韓国、香港、中国での日本のポピュラー文化の人気が高まっている。ひと昔前ならば工業製品は普及しても、映画、テレビ番組、ファッション、ブランド商品といったポピュラー文化はアメリカがほとんどだった。なぜ最近になって日本が注目されるようになったのか。本書は、その問いに答えるために、各国における日本のポピュラー文化の現状をフィールド調査をもとに、多方面からの分析を試みたものだ。

具体的には、台湾のテレビ視聴者調査、香港の若者の消費行動とメディア利用調査など、詳細なアンケート結果から好みや関心の度合いが、また国によっての違いがよく分かる。例えば、韓国では禁止されていた日本の大衆文化が公式受容の方針後、どのように変わったのか、韓国世論の反応を含めてレポートされているが、アジアにおける植民地支配の経験から文化浸透への警戒心が根強くあるという側面も見えてくる。（A5判・242頁・2600円・蒼蒼社）

万葉集の発明
国民国家と文化装置としての古典
◉ 品田悦一著

「万葉集」は、日本の「国民的歌集」とされ、「日本人の心のふるさと」とか「日本文化の偉大な遺産」といわれるが、実は一般の人々は書名すら知らないという状態が、明治の中頃まで続いていたのである。

国文学の学究である著者は、この無名の『万葉集』が国民的歌集という地位を獲得したのは1890（明治23）年前後の十数年間に求められるという。それでは、なぜこのようなことが起こったのかといえば、人々の間に「日本国民」というナショナル・アイデンティティを行き渡らせるための文化装置として「天皇から庶民まで」の歌が集められた『万葉集』が最も適していたからで、本書はそうなっていった経緯を具体的に跡づけていく。（B6判・356頁・3200円・新曜社）

公共事業を考える
市民がつくるこの国の「かたち」と「未来」
◉ 諏訪雄三著

公共事業の見直し論が盛んであるが、単純な処方箋で解決できる問題ではない。著者は通信社の記者として、公共事業と環境問題を中心に取材を続けてきた。本書は、その蓄積をもとに公共事業の見直しを〈政治家を公共事業から切り離し、市民合意にもとづくパブリックを形成する〉作業として捉え返す。

ここではまず具体事例として、吉野川可動堰や長良川河口堰の問題を軸に河川行政のあり方を問い、続いて高速道路から空港まで「造る側の論理」を優先する体質の一方で、誘致に頼る地方の実態を分析、さらに中央省庁再編と地方分権、政治家と公共事業の関係など、あらゆる角度から公共事業の今日的なひずみを明らかにする。その上で、この構造を打破するため、行政という「お上」と住民の「エゴ」の対立を、利益誘導によるごり押しではなく、意思決定過程で合意できるシステムをつくること、それが真の公共性であると提示する。（A5判・344頁・3200円・新評論）